

# 諏訪青年會誌

第二十五號

明治廿五年十二月七日出版

## 目 録

- ◎本會記事  
會同、渡邊千秋、渡邊國武兩君榮進  
祝賀園遊會、叙任、訃報
- ◎論 說  
兵士教育上ノ研究 赤沼金三郎
- ◎傳記  
渡邊千秋君傳(續)
- ◎文 苑  
歌六首、長歌一首、文一、詩十首
- ◎長善館雜記  
送別茶話會、委員改選、主監代理、  
遠足會其他數件
- ◎雜錄、數件





● 廣 告

先に賛助金標準改正に基き申上候通り  
此際改めて自後年々御賛助被下候金額  
御決定御申込み被下度候又會費は本會  
々計整頓の都合も有之候へば未納分早  
速本會々計主任小澤虎明君(牛込區納戸  
町十四番地)宛御送附被下度候

十二月

諏訪青年會幹事

賛助員諸君  
外員諸君

諏訪青年會誌第貳拾五號

本會記事

○入會者 會誌二拾四號掲載後入會者は左の如し

正員 植松金一郎○大和瑞穂○五味純吾○小口貫一○渡邊中○六角三郎○關

次郎

外員 堀内直次郎○小口豊橋○宮坂榮治郎○中村子之作

○會員移動 上島綾藏伊東三省濱二郎平林末雄の四氏は外員に轉せられたり

○會員入校 伊東三省氏は先般在千葉高等中學醫學部六角三郎氏は工業學校に  
入學せられたり

○會員上嶋綾藏氏は先般高等商業學校を卒業せられたりしか去九月大阪商業  
學校に聘せられ又三井四一郎氏は工業學校を卒業せられたりしか此度大藏省印  
刷局出仕を命せられたり

○會員小川平吉氏は嚮に帝國大學法學科を卒業せられ此度京橋區山下町十一



番地に代言事務所を設けられ普く代言辨護の委頼を受けらる

○赤沼金三郎細川藤三郎兩氏 は本月を以て一年志願兵滿期徐隊となれり

○第六十五回月次會 は九月廿五日午前八時より長善館廣間に於て開會す來會者廿八其姓名左の如し

千野郁二○山田肇○大久保福平○安間亥三郎○北澤定吉○延川哲爾○澁川春水  
○林錫一郎○伊藤々太郎○木川又吉郎○飯田治彦○宮坂國吉○小平道三郎○三  
井重一郎○澁川正男○塚原秀彦○小澤質○久保田正夫○小川平吉○武井眞澄  
幹事より二三の報告あり小川氏の發起にて渡邊千秋君渡邊國武君の昇任を祝す  
る爲め園遊會を開くことを決議し夫より例の五分演説を爲し終はりて談笑の間  
茶菓を喫して散會せしは正午過る比なりし

○叙任榮轉 本會副總裁渡邊國武君は去九月正三位に陞叙せられ賛助員山田邦  
彦君は宮崎縣參事官より山口縣參事官に同渡邊長謙君は大藏屬より山梨縣參事  
官に何れも榮轉せらる共に本會の最も名譽とする所なり

○渡邊千秋渡邊國武二君榮進祝賀園遊會 は九月本會月次會決議に基き十月九

日午前九時より麻布區本村町なる渡邊國武君の庭園に於て開く來會者百五十余  
名當日は朝來非常の強雨なりしにもかゝはらず來會者斯の如く多數なりしは未  
曾有のとしして午前九時半過る頃には二君始め悉く來集したり園には池所謂墓  
池に臨める二の茶亭あり來會者の休憩所に宛つ而して後園に二張のテントを張  
り立食の場となせり午前十時振鈴を以て一同テントの下に集まるや青年會幹事  
澁川正男氏開會の趣意を述べ次で渡邊千秋渡邊國武兩君の謝辭あり式を終へ直  
に前庭に於て壯快なる運動を始めた而して降雨益甚だしかりしと雖も一人の  
顧慮する者なく提灯競走盲目柿拾二人三脚の三番を終へて又テント下に集まり  
午飯を喫し滿腹の後新に勇氣を加へ又旗奪野仕合角力をなし或は其臂力を誇り  
或は其鍛鍊を稱し其勇壯活潑なる觀者我を忘るゝ者の如し此を以て嬉戲喝采の  
間に運動も終りを告げ小休憩の後テントの下に參集し酒肴を飲食す而して園中  
新たに設けたる諏訪亭田舎家鷺湖庵にて來會者の望むに任せて鮎子、ゑるこ、薩摩  
汗を饗し之と同時に一方のテント下に於ては大神樂を舞はしめ又種々の技藝を  
演せしめて興を添へたり演技も拍手喝采の聲裡に降雨益々烈しかりしも天幕の



下に蟬集して二君を祝し献酬交々到り放歌高吟時哺に及ぶ二君將に辭し去らんとす會員則ち二君の萬歳を三呼す辭し去らるゝに臨み渡邊國武君青年奨勵の辭あり皆其勸誘の切なるに感ず二君既に辭し去られ來會者も亦序を失せず歡を盡くして散會す時に午後五時なり當日其際歸省中なりし小川平吉氏より電報祝辭を送られたり

又當日園遊會へ金員物品を寄贈せられし諸君は左の如し

一金拾五圓	渡邊千秋君	一金拾五圓 <sup>及ビール四ダース</sup>	渡邊國武君
一金參圓	渡邊長謙君	一金參圓	宮坂常明君
一金參圓	小澤虎明君	一金參圓	猿渡常安君
一金參圓	渡邊亨君	一金貳圓	兩角彦六君
一金貳圓	岩波一郎君	一金壹圓五十錢	濱野泰藏君
一金壹圓	伊藤慶四郎君	一金壹圓	千野儀正君
一金壹圓	伊藤亮五郎君	一金壹圓	伊藤隆三郎君
一金壹圓	宮坂用助君	一金壹圓	岩井要助君

一金壹圓	千野久次郎君	一金壹圓	渡邊榮三郎君
一金壹圓	伊藤祐孝君	一金壹圓	大和茂平治君
一金壹圓	宮坂榮次郎君	一金壹圓	伊東恒三君
一金五拾錢	河西道治君	一金五拾錢	小澤裕郎君
一金五拾錢	志賀當可君	一金五拾錢	有賀文一君

○渡邊長謙君送別運動會 十一月廿日午前九時より本會秋期運動會を兼ね此度山梨縣參事官を拜命せられたる本會賛助員渡邊長謙君送別會を城北飛鳥山に開く此日朝來大風砂塵を揚げ時氣甚寒冷なりしか來會者四十八人なりし前日より其筋に届け置き當日は飛鳥山東北の好地に陣取り先づ諏訪家より拜借せる幕を張り然る後運動を始め高飛競走旗拾二人三脚一人一脚盲目蜜柑拾より角力擊劍に到る迄順を以て終へ其賞者には賞品を與え幕内に於て酒肴を喫す青年會員總代赤沼金三郎氏立て渡邊長謙君を送るの辭を呈し渡邊君の謝辭ありをはりて献酬盛に起り放歌高吟する者あり立て劔舞する者あり紅葉樹間歡を盡して散會したるは晚鴉時に歸る頃なりし當日來會者は



渡邊長謙○千野儀正○小野虎明○兩角彦六○小林三朔○安田義和○岩波一郎  
 ○千野久次郎○小川平吉○宮坂作之助○小平道三郎○大和瑞穂○小澤質○增  
 澤有○武居眞澄○寛克彦○寛潔彦○小口貫一郎○三井重一郎○柳澤久臣○渡  
 邊武文○稻垣秀定○兩角泰○三井四一郎○大久保福平○延川哲爾○赤沼金三郎  
 ○河西義衛○渡邊千春○渡邊麿磨○關次郎○安間亥三郎○寺島傳右衛門○矢  
 澤米三郎○山田肇○永田四方登○諏訪良平○飯田治彦○柳田確次○原哲○河  
 西終藏○千野郁二○矢崎茂十○千野二三郎○岩波廣吉○坂本宮次○澁川正男  
 又當日運動に於て一等賞を得られたるは  
 ○二百二十ヤード競走 關 十次郎 高飛 飯田治彦  
 盲目蜜柑拾 安間亥三郎 旗拾 寛 彦  
 ○三百二十ヤード競走 小 澤 質 三井重一郎  
 二人三脚 寛 克彦 柳澤久臣  
 小平道三郎 一人一脚  
 六百六十ヤード競走 千野郁二 千秋樂競走 永田四方登  
 の諸氏なり又當日金員物品を寄贈せられたる諸君は左の如し

一金五圓 渡邊 千秋君 一金五圓 渡邊 國武君  
 一金參圓 渡邊 長謙君 一金貳圓 三 村 實君

日本分國地圖一冊、日本小字典一冊、日本文學史一冊、日本歴史答案一冊、日本文典  
 問答一冊(賞品として) 上原才一郎君

○贊助金 先に贊助員贊助金額の標準を改正して改めて贊助員諸君に決定を乞  
 たる處今日迄に年々贊助せらるゝ金額を申込れたるは左の如し

一金六拾圓(年額) 渡邊 國武君 一金拾圓(年額) 三 村 實君  
 一金六圓(全) 關 根 親光君 一金六圓(全) 兩 角 彦六君  
 一金五圓(全) 渡 邊 長謙君 一金五圓(全) 鮎 澤 彊君  
 一金五圓(全) 岩 波 一郎君 一金五圓(全) 小 澤 虎明君  
 一金三圓(全) 諏訪神職諸君一同 一金貳圓(全) 小 澤 有鄰君  
 一金壹圓五十錢(全) 朴 郎君 一金壹圓(全) 田 中 宗吉郎君  
 一金壹圓(全) 花 田 猛男君 一同 伊 藤 彌市郎君  
 一同 三 輪 清待君 一同 岡 部 廣君



- 一金壹圓(年額) 武井一郎君 一金壹圓(年額) 福田富藏君
  - 一同 矢崎常藏君 一同 河西健吉君
  - 一同 藤森今朝次郎君 一同 岩井要助君
  - 一同 宮坂常助君 一同 宮坂松五郎君
  - 一同 河西與作君 一同 金井達記君
  - 一同 立石兼太郎君 一同 細川直行君
  - 一同 細川博愛君 一同 小川忠作君
- 本會賛助金及外員會費領収高 前號掲載後賛助金並に外員會費領収高左の如し(編纂の都合により此他賛助金領収高は會誌末項に掲ぐ)
- 一金貳圓(廿五年分) 小澤有鄰 一金壹圓(廿五年分) 立石兼太郎
  - 一金壹圓(廿五年分) 山田邦彦 以上賛助金
  - 一金四拾錢(一年分) 塚原泰藏 一金參拾錢 宮坂榮治郎
  - 一金貳拾錢(半年分) 中村子之作 以上外員會費

○脱漏 前號渡邊千秋渡邊國武兩君榮進祝宴會寄附金者中[金五圓諏訪家]を脱し

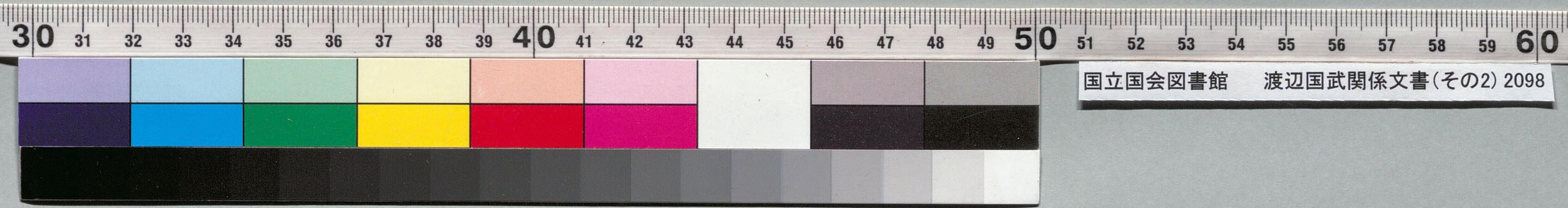
又會員卒業者中渡邊千春氏の第一高等中學校(文科)を卒業せられたること及木川又吉郎氏の高等中學校に入學せられたることを脱せり故に改めて此に掲ぐ

○正誤 會誌廿四號即ち前號編纂の際は編纂委員夏期休業より歸京せざる者あり又は上京匆匆の際にて充分其責を盡くす能はず加ふるに發行期日切迫したるなどより疎漏に陥り誤りたる事を報し又校正行届かず誤植多かりしは會員諸君に謝す所なり乃ち前號四頁會員移動の中河西終藏氏の外員に轉したりとあるは全く誤りたる事にて同氏は外員に轉せず又三十四、三十五兩頁中從五位公御演說中に殊に多くの誤植あり深く同公及會員諸君に謝す

○増澤鐵君逝く 本會の爲め殊に長善館創立の當時は非常に盡力せられたる本會賛助員増澤鐵君は曩に長野表に於て腸窒扶斯病にかゝられしか薬石効なく去十月遂に永眠せられたるは本會員の痛惜措く能はざる所なり

論 說

○兵士ノ教育ニ關スル研究 赤沼金三郎





余カ客歲軍隊ニ入りタル主要ナル目的ハ兵士ノ教育ニ就キテ之ヲ實地ニ研究セ  
ント欲スルニ在リキ今ヤ期滿チテ將ニ隊ヲ退カントスルニ當リ聊カ研究ノ一斑  
ヲ述ヘテ諸君ノ高聽ヲ瀆サントス

凡ソ教育ハ之ヲ心理學上ヨリ區別スルルハ身体ノ教育精神ノ教育ノ二トナシ精  
神ノ教育ハ之ヲ智育德育ノ二トナス又社會學上ヨリ之ヲ分類スルトキハ自ラ教  
育スルト他ヨリ教育セラル、トノ二トナシ他ヨリ教育セラル、教育ヲ分チテ五  
トナス即第一胎教第二家庭ノ教育第三學校ノ教育第四社會ノ教育第五男兒ニ特  
有ナル軍隊ノ教育コレナリ

軍隊ノ教育ハ女子ニ施スコナシト雖モ我邦ノ男兒ハ必ズ一タヒ此教育ヲ受クベ  
キ義務ヲ有スルコトナレバ此教育ノ吾人ニ及ホス所ノ効果ハ決シテ之ヲ輕視ス  
ルコト能ハサルモノアリ然ルニ世人未タ此教育ニ就キテ利害得失ヲ研究セシモ  
ノアルヲ見ズ豈ニ絶大憾事ニ非スヤコレ余カ自ラ揣ラズ奮テ身ヲ兵籍ニ列シ一  
歲ノ間之ヲ實地ニ研究シタル所以ナリ今先ツ體育上ノ効果ニ就テ之ヲ述ベント  
ス

余ハ明治二十四年十二月一日ヲ以テ入營シ直ニ体格検査アリテ体格甲種強健ト  
評セラレ本年十一月廿五日ニ至リテ再ヒ体格検査アリシガ一歲ノ間ニ於テ左ノ  
効果ヲ得タリ

身軀ハ入隊ノ當時五尺三寸六分ナリシカ今日モ毫釐ノ差ヲ見ス肺氣及視力ニ於  
テモ増減スル所ヲ見ズ然レモ體重ハ入隊ノ日十四貫五百匁ナリシカ十五貫四百  
匁迄増進シ大演習後ハ十五貫百二十匁ニ減シ未タ一月ナラサルニ一百二十匁ヲ  
増加セリ胸圍ハ二尺五寸二分ナリシカ二尺六寸五分トナリ呼吸縮張ノ差ハ二寸  
ナリシカ二寸九分トナリ握力ハ右三十四ナリシカ今日ハ四十六ニ進ミタリ

之ヲ要スルニ一歲間ニ於ケル身軀上ノ發育ハ十分ノ効果ヲ奏シタリト云ハサル  
ヲ得ス若シ之ヲ身軀發育ノ時期即十七八歳ノ人ニ適用セシナラハ其體重腕力肺  
氣ノ共ニ増加スルヲ獨リ此ノ如キニ止ラサルヘシ故ニ余ハ切ニ諸君ニ望ム縱令  
軍隊ニ入ラサルモ勉メテ軍人的ノ運動ヲナシ敢テ或ハ怠ルヲナカラントテ  
次ニ精神上ニ及ホセル効果ニ就テ一言セントス但余ハ此點ニ於テハ常ニ冷眼ヲ  
以テ之ヲ視教育ヲ受ケタリト云ハンヨリ寧ロ觀察ヲナシタリト云フ方適當ナル



ヘケレハ余カ精神上ニ影響セシ所ハ甚タ大ナラサルヲ覺ユ  
然リト雖モ意志ノ修練上ニ於テハ頗ル良効ヲ奏シタルモノ、如シナボレオンハ  
嘗テ「不能」下云ヘル語ハ愚者ノ字典ニノミ存スル語ニシテ佛蘭西語ニ非スト曰ヒ  
タルカ余モ我國ノ字典中ヨリ此一語ヲ抹殺シ去ラントスルノ考ヲ起シタリ實ニ  
天下ノ事ハ其成否一ニ意志ノ硬軟如何ニ在ルモノニテ苟モ意志ヲ堅確ニシ之ヲ  
把持シテ失フコトナケレハ他人ニ成シ得ラル、事ハ我ニモ成シ得ラル、モノナ  
ルコトヲ悟リタリ軍隊ノ教育ハ殊ニ力ヲ意志ノ上ニ用キ艱苦欲乏ニ堪ヘテ其期  
望ヲ達シ得ル迄ハ死ストモ休セサル習慣ヲ養成スルヲ目的トスルヲ以テ通常想  
像シ得サル事ヲモ平易ニ之ヲ成就シテ自ラ驚嘆スルカ如キヲ少カラザリシナリ  
余ハ歩行ニ於テハ千里ヲ跋涉スルモ敢テ辭セスト雖モ駈歩ニ至リテハ極メテ不  
得意ナリ一日諏訪森射場ニ於テ射撃ヲ行ヒ午后ハ地物利用ノ實地演習アリテ日  
暮ニ及ヒケル時教官ハ里許ノ道ヲ駈歩ニテ兵營ニ皈ラント揚言シタリ此時余ハ  
竊ニ此ヲ以テ戲言ナリトナシタリシニ教官ハ實ニ此言ヲ實行シテ一里ノ道途中  
一タビモ休止ヲ命セス路ヲ迂シテ士官學校ノ傍ヲ過キ田安門ニ至ル迄疾走シタ

リ而シテ余ハ最初ヨリ「不能」下信シタリシカ軍紀ノ嚴ナルト名譽ヲ重スル心トニ  
引カレテ遂ニ能ク列中ニ加ハリタルヲアリキ又特別機動大演習中ニハ往々到底  
「不能」下信シタルヲチモ勢ニ迫ラレテ之ヲ爲シタルヲ實ニ多カリキ  
之ヲ要スルニ軍隊ノ教育ハ意志ノ力ヲ強カラシムル點ニ於テハ頗ル効果ノ著明  
ナルモノヲ見ルナリ  
以上述ブル所ハ軍隊ノ教育ノ余カ一身ニ影響セシ所ノ効果ナリ今ヨリ更ニ兵士  
ノ教育ハ如何ナル順序ヲ以テ如何ナル事ヲ教ユルヤヲ説カントス  
兵卒ノ始メテ軍隊ニ入りタル井ハ之ヲ六七名宛ニ區分シ新兵掛ノ上等兵ヲ附シ  
テ之ヲ訓練セシメ軍曹及士官之ヲ監督ス午前八時ニ至レハ皆舎内ノ練兵場ニ整  
列シテ演習ヲ始ム二時間ニシテ三十分間ノ休憩アリテ學科ヲ授ク午後ハ〇時四  
十五分ヨリ二時間ノ術科アリ畢テ二十分間敬禮法ノ演習ヲナシ以テ一日ノ課程  
ヲ畢ル五時食事ノ後上等兵ノ學科アリテ午前ノ復習ヲナス八時ニ至レハ就蓐ヲ  
報シ八時三十分ヲ以テ盡ク燈火ヲ消ス平日ノ起居ハ大畧此ノ如シ  
其平日學ヲ所ノ演習ハ第一各個教練中不動ノ姿勢ニシテ即チ單ニ直立セル姿勢



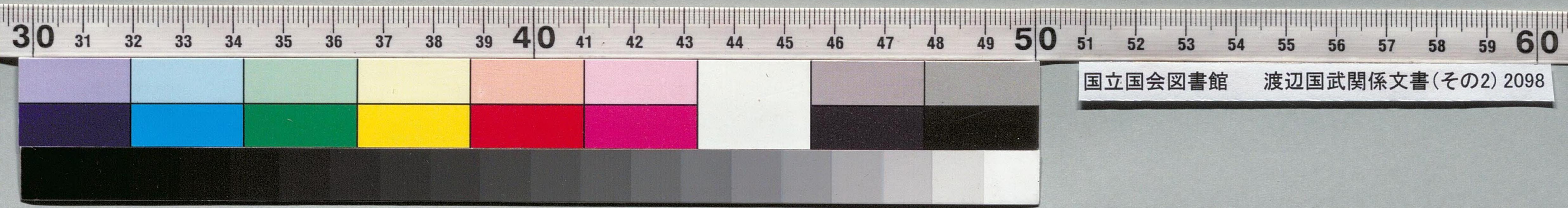
ナリ此姿勢タル其要領ヲ得ル極メテ困難ニシテ三年間兵役ニ服スル老兵ニシテ尙ホ此姿勢ノ要領ヲ得サルモノアリ次ニ行進ノ法ヲ教フ此法タル極メテ困難ニシテ容易ニ熟シ得ス余モ嘗テ午前八時ヨリ午後三時迄行進法ノミヲ習ヒ脚足疲勞シテ僅ニ歩スルニ至リ竊カニ邯鄲ノ歩ヲ學ヒテ故歩ヲ失却スト恨ミタルトモアリキ此習練ニモ二ヶ月間ヲ費シタリコレヨリ行進間ノ諸動作等步兵操典ニヨリテ逐次ニ之ヲ行ヒ三ヶ月ノ後部隊教練ヲ始メ射撃ヲ行ヒ銃槍ヲ教ヘ四ヶ月ノ後野外演習ヲ始メ中隊教練ヨリ大隊教練ニ移リ六ヶ月ノ後二週日間習志野々營ニ趣キテ戰鬪術ヲ演習ス其後聯隊教練ヲナシ畢テ秋季機動演習ヲ執行ス器械体操柔軟体操ハ一歳ノ間絶エス之ヲ行フモノトスコレ一歳間術科教育ノ大略ナリ

學科ニ在リテハ先ツ禮式ノ精神及上官ノ姓名ヲ教ヘ又勅諭并讀法ノ要旨ヲ授ケ室内起居ノ定則ヨリ着裝ノ注意武官ノ階級陸軍禮式勳章ノ種類等ヲ教ヘ又近衛隊ノ主義軍人ノ名譽聯隊旗ノ歴史等ヲ授ケ二ヶ月ノ後ニ至レハ漸ク軍事上ニ及ヒテ歩測目測ノ法銃ノ保存射撃ノ要旨歩哨ノ任務前哨勤務尖兵斥候風紀衛兵ノ

勤務行軍ノ心得守衛ノ心得等ヲ授ケ又命令ノ傳達等ニ就キテ演習ヲ行ヘリ其學術教授ノ順序ノ如キハ數年ノ經驗ヲ積ミテ十分ナル思考ヲ費シタルモノナレハ規模井然トシテ觀ルヘキモノ少カラスト雖モ獨リ精神上ノ教育ニ至リテハ未タ完全ナリト云フヘカラサルモノアリ

軍隊ニ在リテハ其新兵教育ノ責ニ當ルモノ教育學ニ於テ意ヲ用キルコト無キモノ、如シ是ヲ以テ今日ノ進歩シタル教育法ヲハ一モ採取スルコトナク全ク其意ニ任セ教フヘキ簡條ハ之ヲ兵卒ニ暗記セシメ其事ノ了解シタルヤ否ヤハ餘リ問フ所ニ非ス而シテ能ク暗記シ得サルモノニハ唯叱責嘲罵ノ罰アルノミ此ノ如クニシテ良兵卒ヲ得ント欲スルハ木ニ縁リテ魚ヲ求ムルヨリ甚シト云フベシ余ハ兵士精神上ノ教育ニ於テハ大ニ改良スヘキモノアルヲ信スルナリ

今日ノ軍隊ハ單ニ軍律ノミニ依頼シ長官ノ命令ハ必ス服従スヘシト教フルコトナルカ死生ノ際ニ臨ミテ十分ナル責任ヲ全フスル者ハ冷淡ナル此一語ヨリモ寧ロ肺肝ニ銘シテ忘レサル感恩ノ情ニヨリテ起ルモノナリ昔勾踐ハ一樽酒ヲ上流ニ灑キ兵士ト共ニ之ヲ掬飲シテ以テ兵士ヲ感奮セシメタルコトアリナボレオンハ銃





ヲ捨テ睡眠セル歩哨ニ代リテ其勤務ヲ執リ全軍ヲシテ感泣セシメタルヲアリ上官タルモノ眞ニ深切ノ心ヲ以テ兵士ヲ愛撫シ滿腔ノ熱血ヲ灑キテ之ヲ教育シ而シテ其教育ノ法心理ニ基キ自然ニ合セバ其効果ヲ奏スルコト思半ニ過クルモノアラントス

余ハ小學ノ德育ニ於テ學校ヲ以テ國家ト見做シ交遊ヲ以テ社會ト見做シ平日學校ヲ愛シ交遊ニ接スルノ心ヲ推シテ國家ヲ愛シ社會ニ盡ス美德ヲ養成スルノ説ヲ持スルコトナルカ兵卒ノ教育ニ於テモ亦先ツ其中隊ヲ愛スル感情ヲ惹起セシメテ皇室ト國家トニ就キテ明瞭ナル思想ヲ有セシムルノ必要ナルヲ感スルナリ此事タル我長善館ニ見ルモ亦然ルモノアリ今我長善館ニ對シテ冷淡ナルモノハ他日世ニ立ツノ日國家ニ對スルノ感情モ亦必ス冷淡ナルモノナリ今日相互ノ交際ニ深切ナラサルモノハ博ク世人ニ交ルニ當リテ必ズ深切ノ心ナキモノナリ何事モ皆誠ノ一點ヨリ發スヨク此一誠ヲ養ヒ得レバ君ニ忠ニシテ親ニ孝ニ兄弟ニ友ニシテ朋友ニ信ナリ徒ラニ漠然トシテ愛國ト云ヒ忠君ト云ハンヨリハ寧ロ其目前盡スヘキ義務ヲ盡シ之ヲ推シテ愛國忠君ノ行ニ進マシムルヲ以テ適當ナル方

傳

記

○渡邊千秋君の傳

(前號の續)

便ナリト信スルナリ

余ハ世人カ軍隊ノ教育ヲ以テ度外ニ置キ教育者ト雖モ之ニ注意セサリシテ憾ミ躬ラ軍隊ニ入りテ其教育法ヲ視察シ其得失ヲ研究シタレハ他日兵士教育論ヲ著ハシテ十分ニ之ヲ論セント欲ス故ニ今夕ハ單ニ其一斑ノミヲ陳ヘ兵士教育ノ忽ニスヘカヲサルコトヲ論シテ諸君ノ高聽ヲ瀆セリ

君の嘗て職を伊那縣に奉ずるや撿田の事を督し全縣の半部を管掌す屬吏君に説て曰く撿田は歩刈と名つけて各田を撿査し一步の収獲に依り全歩の地租を積算するを以て程式と爲すと雖も其實必らず然るにあらす假令多獲なるも舊租に昇らざるを率とし又少獲なるも舊租に減せざるを度とす府縣皆然らざるなし故に人民の目前に於て収獲を量るに多獲は捨て少獲は増すも民心常に平なり只簿書の計算を以て之を取捨するに在りと君説て曰く果して然らば現行の撿田徴租



の法を廢して可なり己に此法の存する従はざるへからすと収獲の多少により各地其實を以て租額を定む多獲の人民之を喜はず數々君を陷害せんとす既にして其非を憐めて始めて君の公平に服す後日君專斷の事に坐して官を免せられ東京へ引致せらるゝや部民路に出て、其別を惜み濺くに涙を以てするに至る君刑滿ちて釋さるも家に還らず都門に流寓して日夕天下の志士と交り且喜て草莽の激徒を會し時世を慷慨す時に外山愛宕兩郷等の不軌を圖るあり人心恟々政府大に戒嚴す君か當時の懷抱する所時世に背馳するも毫も顧慮するところなし一々某樓に遊遊を試む坐にあるの妓把るところの扇を出して書を需む君醉後直に筆を取り二句を題す刺奸屠賊斬千斷賊肉投犬奸肉貓と又頻年全國の米價騰貴し南京米を輸入す君大に其非を論し且時風の浮華に流れ質實を失ふを喜ひす和歌を詠して其志を似めす曰千足てふ國は昔にかはらねとみつ穂をよりに乞ふ世なりけりいさきよく左津矢たはさみいつの日か神世なからの春を迎へむ時に東京府に府兵局を置き國事犯を處斷す局議君の行爲に異志あるを疑ひ俄に拘禁するところとなり糾彈甚た嚴なり當時審問の式備はらずと雖も其身分に因

て所遇を區別す君の拘禁せらるゝや當該の官吏其實を擧ぐるに急なるを以て本貫の貴賤を問ふに違あらず捕吏直に君の袴を奪ひ毫も平民と異なるなく直に下して獄廷に坐せしめ紅總を繫ける十手鐵製の訊杖を以て數々君の肌を突き頻りに事實の供出を促す然れども君固より當時の暴舉に關係なく舉證明白數日の後釋放せらる君深く府兵局の擅恣を怒り人に語て曰余不敏と雖も平生操持するところのものあり何を事の勝算を圖らず外交に妨害を與へ以て邦家を危くするの兒戲を學ぶものならんや然りと雖も今や此事に逢ふは聊か自から招くの譏りを免るゝ能はず言論詩歌の如き咨嗟永懷の已むを得ざるに發すと雖も古今の史に徴するに往々奇禍の媒となるもの少からずと是より自から警め且大に後輩を戒む

既にして君郷に歸り再び伊那縣に任官す數月にして伊那縣廢せられ筑摩縣を置かる君復た筑摩縣出仕に補せらる尋て權典事より權參事に累遷し七等判事を兼ね

始め伊那縣廢せられて筑摩縣へ廳務を交附するに當り其事務極めて錯雜滿廳の



吏員殆んど手を下すに由なからんとす君則隻手其事に任じ藩債處分其他從來の政務悉皆整理を遂げ毫も支吾なきを得せしむ當時君人に語て曰く是れ余か聊か父母の國に盡さんとするの微意を果せるなりと

明治九年八月政府大に縣の廢合を行ふ筑摩縣も亦廢せられ長野縣に合す是より先き政府累りに政務の更張を圖り内務省の剝置地租改正局の新設等専ら人才を擧ぐるに急なり有爲の士亦争ふて出身の途を求む大久保内務卿君を内務省に補せんを以てす且つ往々君に勸むるに適意の官衙に出てんとを以てするものあり君首を振て曰く止め止め廢藩日猶淺く縣政未だ緒に就かず何る已の榮地に進むを喜ひ半途抛ち去るに忍ひんや況んや當時の縣令永山盛輝は余か曩に贖貨交換の事に坐して幽閉せられ嫌疑蟬集殆んど其歸局を知らざるの時民部省の監督司に在て余か爲め辯疏し其罪にあらざるを主張せりと聞く士は已れを知るものゝ爲めに死す君復言ふなかれと毫も其志を動かさず人にて其義を重んずるの深きに感ず筑摩縣廢せらるゝに及て判事に任じ東京上等裁判所に従事す當時訴訟の順序審判の方法猶未だ完備せず司法大小丞其權を専らにするの傾向

あり判事は徒に其願使に應ずるものゝ如し而して判事亦甚はた之を意に介せざるものあり審判の事多く下僚に委し判事は徒に裁判の形式を容くるに過ぎず君大に之を不可とし以爲らく如此にして豈に裁判の鞏固を全くすへけんやと因て先づ大丞青山貞に面し大小丞の職とするものは單に省内の事務を處理するに止るべく裁判の事に容喙すへきものにあらざるを論し更に司法卿大木喬任に大に建議するところあり其意大小丞を廢して書記官となし第一級判事補以下を廢して書記となし第二判事自から裁判の實を行ひ第三以て裁判を鞏固ならしめんと欲するに在り然れども君の建議は只司法部内の物議に渉るのみ遂に新潟裁判所へ遷さるゝに至る蓋し君の建議は直に採用するところとならずと雖ども翌年に至て大に司法官の職制を更革し粗々君の意見を貫徹するを得たり君の任に新潟に赴くや専ら刑事を擔當し旁ら民事を負擔す當時該裁判所の習慣たる審判の決行は所長の決判を経るにあらざれば允さず君以爲らく是實に裁判官の獨立を害するものなり抑も所長を置くは只た所務の統一を計るに在るのみ裁判の事は判事の權に屬す宜しく改むるところなかるへからずと一日所長判事



堤正巳に面して曰く小官久しく行政官に在り今や司法官に轉す未だ裁判審結に練熟せず此際足下に就て教を受くへきは固より其處なり然れども判事獨立の權に至てはすも假すへからず當裁判所の習慣を見るに審判の決行は常に所長の決判を経るにあらざれば施行する能はず是れ豈裁判獨立の旨趣ならんや願くは更正する處あれど禮意懇勸之れを論す堤判事君の論を然りとし是より判事の獨立を全くするを得たり居ること未だ幾ならずして高田支廳長に赴かんとす是れ其名は高田支廳の所管は人心強悍にして常人の治し難き地方なるを以て特に君に委任するに在りと雖ども其實は裁判官獨立の議論適ま此命を促したるのみ君の司法官となるや曩きには裁判の鞏固を司法卿に論し今復判事の獨立を所長に説き其言行はれざるにあらざると雖ども施て上司の思むところとなる其再三任所を更ゆるに至るは實に己むを得ざるものあればなり (以下次號)

文苑

○春月 諏訪忠元

たちわたる霞をもれて春の夜はかけおほるまも見ゆる月哉

○花

菅の根の長きひと日を野に山に花見てくらす春う樂しき

○野霞

宿からん末野をさしてゆく人も霞にまよふ春のゆふくれ

○渡邊千秋ぬしのもどより北海道の樺もて作れる

短冊を送りければよめる 飯田武卿

ここの葉の花にほひて興えぞのなにはざくらもよには出らむ

○同人か淀の水車のつるへひとつもてるを

歌によめと云ければ

めぐりてしその片われの水車とはや淀のかはりゆく瀬を

○山家橋 千野方義

花ちりしの中には人のあともみず山さくら戸のまへの棚橋

○詠夏人事歌 岩本尙賢



あらかねの土もさくておみな月のてる日さかりに、おこし炭まへにとりつみにゆる湯を鼎にみて、夏引の糸ひくをとめ、うのいどの永き日ぐらし、くるわくのひましなければ、身にあゆる汗もぬくはず、さみだるゝ髪だにあげず、いきつぎて、いそしむをとめ、年老し、親ややしなふ、いとけなき、子をやはぐゝむ、たをやめの、たよわき身だに、かくしつゝ、いそしむものを、ますらをやむなしかるべき、國のため、君のためには、火をもふみ、水にもいりて、いきのをの、絶ぬかざりは、つとめざらめや、

○見月有感

岩本正方

月にむかひて、思をはらし、花をながめて、心をひらくは、世の人のつねにこそありけれ、けふも残れるあつさ、いとたへがたくて、わびしきまゝに、くるゝすなはちはしちかく出で、例の光みはやさんどであるに、山のはに、むら雲たちわたりて、よひすぐるまで、いでもやらす、いとまぢわびて、

いくたびか雲に心のかゝるらん月まぢわびては、しぬする夜は、なとうちずしつるまゝに、やう／＼雲のたえまより、ほのめき出でたり、これをこそうれしと思ふに、むかひの竹むらさやぎたちて、すゝしき風さへふきいづれば、またなき夜のさまと

なんなりぬる、ふくるをもわすれて、うちむかひ居れば、過し世のことゝもの、そゝろにうかひ出るやあやしき、かじこきみかどの、ねほんひかりも、よからぬ臣達のむれいで、おほひ奉るには、くもりがちにこそ、それはすなれ、何がしのみかどの、浮雲掩而乍昏、といふことを、おほんてづからかゝせ給ひて、御手筈の中に、ひめれきたまひけんことゝもを、こよひの月のさまに照して、思ひめぐらし奉れば、こたびは、涙にくもりて、いつしか光もよきはみやられずなりぬ、

○和三輪毅軒詩以答十首

石門吏隱

看君素志育英存、才俊幾人爭及門、笑我間關少成事、也投窮北定迷魂、  
交游四散幾人存、冷雨寒煙處々門、君客他鄉同我感、湖山光景入羈魂、  
讀書人去有誰存、知是浮生迷德門、早使楚材感晋用、秋風葦葉促歸魂、  
人云玉帛國長存、知不虎狼窺我門、月沒北溟兵戍遠、一聲羌笛最驚魂、  
數奇猶看奇骨存、石門一咲出家門、窮途不悔投窮北、身死擬傳未死魂、  
負辜家山松菊存、猶思兒女候柴門、窮途今日成何事、贏得酒詩狂杜魂、  
兄弟三人志各存、兄游北海弟都門、鵝湖山下雙親住、一事葵心同夢魂、



放浪多年志猶存、看他尺鯉上龍門、嫖姚定遠亦人也、柯太江山入夢魂、  
鵝湖山下二親存、昨在都門今北門、何日承歡吾願足、秋風吹老冷羈魂、  
雪泥鴻爪夢空存、吹老秋風五柳門、若比淵明多慙德、折腰猶未賦歸魂、

○房州旅行一斑

(前號の續き)

中洲生

野島崎巖頭燈臺あり明治二年官の建る所に係る予輩の至るや臺守喜て之を導く  
螺旋階を攀ち四轉して其頂に至る十六邊形の一小室にして各面皆三稜玻璃を具  
へ其總數約七八百に上る以て光線を中央の一帶に集合せしむ臺、臺脚より九十九  
尺水面を抜くと百三十四尺火力十九ノット(九里餘)と云ふ其傍に辨財天を奉祀す  
北條より三里餘にして安房の東海岸に到るへし中夜鷄鳴を聞き衾を蹴て起て曰  
くこれ惡聲にあらざるなりと時に殘月西天に懸り觀音崎の燈光微に波を射る山  
路を経て海岸に達す時に天漸く白し嗚呼旭日の坤輿を照すもの先つ我か蜻州を  
照す東方日出國の名蓋し以あるなり今や旭旗其光を放ち將に明を日月に争ひ以  
て宇内に輝かさんとす日本民族豈誇らざるを得んや予朝暾の漸く登るを見て君  
か代の樂を奏し漫然自ら歌ひ妄に號して旭日昇兮歌と云ふ

旭日昇兮旭日昇 曙光先照大蜻州 朝暾徐蹴大瀛灣

白鶴高唳九皋天 旭日昇兮旭日昇 曙光先照大蜻洲

海岸を採集し得る所頗る多し時に天漸く黒し雨沛然として至る乃ち倉皇歸裝を  
なす陰雨濛々道路泥濘山路道暗き所樵徑に陥り野村人稀なるの時麗也に吠えら  
る酸風人を羊腸に襲ひ腥雨人を原頭に濕ほす嗚呼天の人を成す蓋酷の酷なるも  
のなり人にして天の虐待に堪へずんは則止む苟も此虐待を排し益剛毅の志氣を  
振興せば則晴天白日の好天地に俯仰するを得へし人々此心を以て心とせば則ち  
何ぞ大日本の坤輿に雄視せざるを患へんや  
宿雨漸く霽る輕舸を僦て魚を網す微風海面を掃ひ漣漪舳を撃つ網を下すと三四  
獲る所甚少し乃ち漁夫を唆し益遠く去らしむ乍ち驚く雲影西天を掩ふに漁夫倉  
皇色を失ひ前後網を収めて歸裝をなす曰く西風將に大に至らんとす乞ふ速に歸  
らんと蓋西風頗る恐るべきを以てなり予輩唯々として諾す漁夫力を極め臚臍爲  
に焦く舸駛ると射る如し俄にして風伯波を衝て來る激浪洶湧怒濤澎湃輕舸猶木  
葉の如く舟行甚た其意に任せず乍ち波濤の峯に登れば乍ち激浪の谷に陥り白珠



舟に碎け衣帯悉く濕く嗚呼昨は雨に山徑に艱み今は風に水程に困む南洲嘗て曰く世上人心の險は山路の險を涉歴するよりも艱と沈思せば世途の轆軻胸に填ち覺へず慄然之を久ふす

翌海岸を歩して那古に至る一友叫て曰く得たり得たり乞ふ假に濁浪歌と名けん可歎

昨夜狂風翻濁浪今朝濁浪捲地來嗚呼濁浪兮濁浪何爲不載紅塵去

(以下次號)

長善館雜記

○主監代理長善館主監神尾光臣君去る七月中辭任せられしより以來暑中休暇等にて其後任撰擧の事も彼是後れ來りしが九月十六日常議員會に於て後任者の定まるまで代理を兩角彦六君に囑托することに決し其承諾を得たり  
○館生赴任及送別會 館生上島綾藏君には先きに高等商業學校を卒業せられしが此度大坂府立商業學校の聘に應じ九月廿七日出發赴任せられたるを以て館生

は其前夜君を招待して送別會の茶話會を催せり席上岩波廣吉小平道三郎二氏の演説上島君の謝辭あり了て茶菓を饗し極めて盛會なりし猶翌朝は館生多く全君を新橋停車場まで見送りたり  
○館生就職 前項上島君の外館生法學士小川平吉君は此度東京市京橋區山下町十一番地に事務所を設け代言業務に従事せられ又三井四一君は十月中大藏省印刷局に出仕せられたり本館創立以來僅々一ヶ年半而かも有爲の人材を輩出すること斯くの如し又以て我長善館の前途を卜するに足る因に曰く小川平吉君には十月三十日を以ていと盛大なる代言披露の宴會を神田錦輝館に催され本館々生をも招待せられたり依て館生は花瓶一對を贈りて祝意を表し二十四名參會せり  
○天長節祝賀式 十一月三日午前五時廣間に於て舉行せり先づ陛下の御影を拜し君か代を歌ひ次に勅語を捧讀し次に一齊に陛下の萬歳を祝し奉りいと嚴肅に式を畢り順次退散せり又全日午後七時より廣間に於て祝賀の茶話會を開き快談數刻消燈時に至て散會す



○送別茶話會 本館創立の際にあたり創立委員とし其後常議員として公務の繁多なるに關はらず本館の爲めに熱心盡力せられたる渡邊長謙君には大藏屬より山梨縣參事官に榮轉せられ不日任地に赴かれんとするにより館生は十一月十三日午後六時より全君を招待して本館廣間に送別の茶話會を催せり席定まるや林鋔一郎氏開會の趣旨を述べ赤沼金三郎氏館生總代として祝詞及送別の辭を呈し其他鹽原鈞澁川正男小平道三郎諸氏の演説あり了て茶菓を饗せり此際全君には館生の請によりて君か昔日郷里二の丸の長善館にて文武の道を修められし時より今日に至るまでの經歷及君か嘗て直接に聞き得たる所なりとて長野縣下北海道移住者の率先たる諏訪郡湖南村眞志野耕地某氏の履歷をも詳細に語られ大に館生をして感奮興起する所あらしめられたり夫より談笑に時を移し閉會せしは午後十一時過なりし

○委員改撰 長善館委員三井四一郎氏は十月にて全林鋔一郎氏は十一月にて任期満つるを以て改撰せしに小平道三郎鹽原鈞の兩氏當撰せられたり

○入館及退館 本年九月以降退館せられし諸君は左の如し

小松澄雄君 坂本宮次君 上島綾藏君

又入館せられし諸君は左の如し

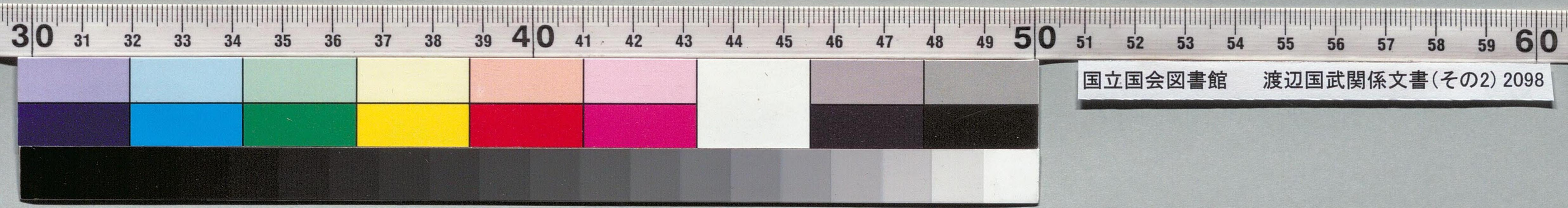
大和瑞穂君(上諏訪村) 小貫一君(下諏訪村)

渡邊中君(上諏訪村)

○行軍慰勞會 一年志願兵赤沼金三郎氏は小機動演習并に特別大機動演習の爲めに十月五日出發して二毛の野に赴かれしか同月二十八日午前三時演習を了りて首尾よく歸館せられたり依て二十九日夜館生相會して全氏を招待し慰勞會を開き併せて演習中千軍萬馬吶喊馳突の實況を聞けり 因に曰く同氏は十一月卅日を以て滿期除隊となれり

○及第 柳澤久臣氏は昨年九月出京直ちに濟生學舎に入學醫術を修められしか今年十月内務省醫術開業前期試験に應じ首尾よく合格せられ本月廿四日其及第證書を受領せられたり赤沼金三郎氏は一年志願兵終末試験に及第して陸軍歩兵二等軍曹を拜命し豫備役を申付られたり

○茶話會 前項記するか如く委員三井林兩氏滿期辭任せらるゝに付其勞を謝し





併せて赤沼氏の一年志願兵滿期三井氏の就職及柳澤氏の卒業を祝する爲め十一月廿七日午後七時より茶話會を催し先づ小平道三郎氏開會の趣意を陳へ次に澁川正男岩波廣吉等諸氏の演説及林赤沼兩氏の謝辭あり茶菓の饗應例の如く愉快を盡して散會せしは消燈時刻に近かりし當日は兩角主監代理にも臨席して一場の演説を致されたり又渡邊館長にも會同時刻より來館せらるべき筈なりしか公務の爲め果されざりしは遺憾なりき

○長善館生第五回川越遠足一名豪勇遠足紀行 我館友會は秋氣清高の候に際し十月十五十六の兩日に亘りて學校休暇なるを幸とし爰に第五回の遠足會を催せり初議高尾の妙景を探るに決す而して彼地東京を距る十有五里館友中其道程遠きに過ぐるを全く兩日を費やすを憂ふるもの多し十四日の夜復議して遂に通宵歩行して川越驛に到り大田道灌の舊墟を訪ふに決す此企に應ずるもの無慮十有六人徹夜旅行の如き極めて壯快なる舉動を試む我館友の活潑剛健なる推して知るべきなり

十五日日暮の鐘聲耳朶に達し晚鴉歸に歸るの比ひ皆輕裝玄關に集まり時の來るを待つ午後八時歡呼喝采の聲と共に館を發し放歌朗吟して進む路傍のもの此一行に驚かさるものなかりき

行くと二里板橋に達す之を過ぐれば市街全く盡きて四面暗黒咫尺を辨せず即ち用意の小田原提灯を點し之を圍んで進む或は深林を過ぎ或は田野の間を經又時に村落を過きて進む數里膝折村に達す時まさに三更に垂んとして衆漸やく飢渴を告ぐより路傍に憩ひ行厨を開き喫し了りて意氣又壯放歌朗吟歩調肅々更闌け人既に定まりて天地共に眠るか如し金風蕭颯として樹梢を度り秋氣爽然として肌を襲ひ秋蟾唧々草露に咽ふ四更の頃ひ片月東天に出て雲間幽かに光を洩らす吾人をして一層の夜氣寂寥を感せしめたり

黎明川越に達す戸々皆鎖して憩ふに所なし即直ちに舊城趾に至る城距は驛を距る十數町今や全く桑田に變し只禾黎の油々たるあるのみなりと雖も其規模宏壯太田氏往年の威風を追懷するに足る城壕の如きは茅蘆叢生し多くは埋没して只其痕跡を存するのみ當時の殿舎は現今入間埼玉兩郡の公會所に充つ東方に方て道灌手植の杉二株あり枯れたりと雖も幹尙兀立す傍らに一祠あり明神を祀る往



昔道灌に冥助を與へ靈驗今尙顯著なりと云ふ數歩を隔て、一堤あり堤上に一小亭を見る榜して見晴亭と云ふ衆大ひに喜ひ就て憇ふ此亭や窓を排すれば八州の平野漠々として遠く亘り模糊の間遙かに常の筑波山を望む折しむ東天紅を潮して彩雲天に舞ひき眺望絶佳衆舉つて大愉快を絶叫せり

川越は甘藷を産するを以て著はる因て婢に命して芋飯を炊かしめ圍坐して之を喫す午前十時途を浦和驛に取て發す朗吟談笑の間徑ちに浦和驛に達す此處より鐵路の便によるもの六人餘は尙健歩疾脚して午後八時半歸館せり往復の里程并せて廿三四里時間を要すること廿四時間之を名つけて豪勇遠足と云ふ非か

今や都下六萬の書生多くは優柔懦弱に流れ或は風流逸樂を事とし到る處皆優柔の書生を見るの時に當り我館は獨り高く俗流に擢んで質撲剛健活潑敢爲を以て其本色となす我館の特質蓋し爰に存す庶幾くは先進諸君の知遇に背かざらん乎、

○圖書室寄附書目 (前號之續き)

文學書

古文孝經解釋(一)小澤實○小學高等讀本(二)筧潔彦○國文教科書(二)安間亥三郎○ロングマン第五讀本(一)三井四一郎○釋迦如來誕生會(一)三井四一郎○十二段(一)全人○戀八卦柱曆(一)全人○第一國民小説(一)全人○修辭及作文學(一)矢澤米三郎○クワツケンボス小文典(一)筧潔彦○スベルリング(一)全人○筆戰場(二)稻垣秀定○漢文講資(一)澁川正男○鴻崖遺稿(一)小口久衛○作文一千題(一)小澤實○條約改正(一)工藤重義○スベルリング(一)永田四方登○ウキルソン第二リドル全人○ナシヨナル第一リドル(一)全人○ウキルソン英文典獨案内(二)工藤重義○ナシヨナル第四讀本直譯(一)全人○英語學全書(一)全人

理學書

常用曲線(一)澁川正男○齒之養生(一)北澤定吉○理科問答(一)永田四方登○物理學教程講本(二)全人○植物學(一)北澤定吉○植物自然分科檢索表(一)安間亥三郎

地理、歴史、傳記等

日本地理(一)上原才一郎○北友郡戰爭記(一)赤沼金三郎○諏訪郡明細圖(一)安間亥三郎○北海道地圖(一)岩波廣吉○大日本新撰地圖(一)山田肇○世界百傑傳(一)筧潔彦○ナポレオン全傳(一)全人○スペイン萬國史(一)全人○歴史(一)筧克彦○スペイン萬國史直譯(一)小坂慶二○疑問體歴史(一)坂本宮次○地理學問答(一)全人○日本地理統計(一)金井佐喜太○獨文忠臣藏(一)永田四方登○開業醫立志編(一)小口久衛○日本小歴史(三)永田四方登○デキツケンズ英國史全人○カツケンボス合衆國史直譯(一)北澤定吉○デキツケンズ英國史直譯(一)山田肇○明治政史(一)尾澤太



雜書之部

東京商業學校規則(一)小平道三郎○金港堂小説叢書(二)三井重一郎○議員演說蛟龍爭珠錄(一)全人○貧富氣質(一)上島綾造○新演說全人○東洋立志編(一)同人○考物博士(一)稻垣秀定○口からでまかせ(一)全人○豪傑をさな物語(一)全人○生徒之寶(一)寛克彦○活ル神(一)全人○見而得生(一)全人○心のあらたまるわけ(一)全人○眞神を信する理由(一)全人○勳章紀章及制服之圖(一)安間亥三郎○寄想春史(一)小松澄雄○東京府尋常中學校規則適要(一)安間亥三郎○全國有志大演說傍聽筆記(一)小口久衛○烈士の血涙(一)全人○東京府官私立學校明細表(一)兩角泰○高等商業學校規則(一)岩波廣吉○高等商業學校一覽(一)全人○東京遊學案内(一)工藤重義○氣天籟(一)澁川春水○家計簿記法(一)小澤質○劍舞集(一)安間亥三郎○トランプ手術(一)永田四方登○獨文實用野戰術(一)全人○讀書法(一)工藤重義○出版書籍目錄(一)赤沼金三郎○亞細亞學館規則(一)小澤豁郎○東都狀十月旦(一)小川平吉○清佛戰爭記拔粹「自譯」小澤豁郎

政治法律哲學宗教々育書之部

脩身叢話(一)諏訪良平○拾九年改正教授術(五)山田邦彦○大觀經(一)塩原鈞○政教論(一)山田邦彦○明治廿三年長野縣學事統計表(一)武井一郎○日本教育史資料(五)渡邊國武○單級教授法實驗成績報告(一)山田邦彦○長野縣第三回勸業年報(一)武居一郎○長野縣物產論出入表(一)全人○法學通論(一)小口久衛○民法哲學(一)同人○民事要録(八)岩波廣吉○佛遺教經(一)安間亥三郎○明

治廿三年外國貿易概覽(一)渡邊國武

雜誌

(青年會々誌ト交換)

松本親睦會雜誌(九)松本親睦會○防長學友會雜誌(六)防長學友會○信濃殖産協會雜誌(四)信濃殖産協會○さぬき(二)さぬき會○豐浦學友會雜誌(十)豐浦學友會○舊福山藩學生會雜誌(四號五號)○播摩雜誌(五)播摩雜誌社○伊那鄉友會雜誌(四)伊那鄉友會○松代青年會雜誌(一)松代青年會○大和學友雜誌(一)大和學友會 (以下次號)

郷里通信

○稻作の被害 本年我郡に於ける稲作は抽穂以前に在りて平坦部湖邊に連接せる地方螟蟲を發生し稍蔓延の徴候を現はせしにより郡役所はそれ／＼告諭訓令を發し銳意これが驅除豫防に従事せしめられたれば大に其害を減し抽穂以後二化の季に於ては或る一部に限り稍々著るしきものありしも被害殆んど擧ぐるに足るものなかりし然るに却て抽穂前螟蟲の害を被らざりし米澤、北山、湖東、豊平、泉野、原の山部六村に在ては抽穂以後に至り甚たく立枯白枯等の害を被りしに由り郡役所は其實況及び原因を取調へしめたる處右は概して害蟲の爲めにあらずして



(間々螟蟲の害をも見る)即ち莢の中部若くは葉の最上部穂の最下の處に於て黒色の腐敗點を呈し全穂全く登實せずして枯死せるを見たり而して其班點穂の中途にあるものは其局部より上枝にある稈は糝となり下枝に在るものは充實せり害狀此くの如くにして他に蟲類寄棲の痕跡を認めず隨て些の蝕痕なし而して被害の度は稻草の種類及び稻田の地勢によりて多少あるものゝ如く概して早稲に多く樹林に傍ふたる稻田に著るし且秧田に充てたる部分に於て最も甚きしを見る是れ或は肥料に因するか地勢に由るか又或は氣候の致す所か當時専ら其原因を探究すれども未だ其由る處を明かにせず隨て來年に於ける豫防法を講ずるに由しなし

○秋熟の概況 前項に記する如く抽穂前後の被害により且つ春初浸水の害ありたれば初めの程は如何にと苦慮せしむ左したるとはなくして郡内を通すれば凡七八分の間にあり我郡の如き比年米穀の不作なく然して本年の如きは米價も頗る高價なりしかは推して以て農家の豊況を知る可し

○製絲業の増盛んにしてこれに従事する者の年々に増加するのみなれば我郡の爲め頗る賀すべきにして本年の如きは製絲社總數二十五に上り其釜數の總額は過る十月末の調へによれば八千七百十六個而して日々製絲場に入りて働く工男工女の數は男は千二百七十五人女は九千八百八十七人なりこれによりて製出する生絲の總額は十月末實産額と十一月以後の概算額とを合せて九萬六千九百四十九貫四十二匁に上るへく之によりて得る純益は凡五十萬圓なりといふ我郡の小にして此巨額の實益あり製絲の増々隆盛するは眞に他郷に誇るに足る

○師範學校卒業生同窓會 我縣師範學校卒業生は同窓會を組織し毎年春秋二度つゝ集合して各郡教育の狀況及び同窓員の動靜等を報告するととなしたるか本年は上諏訪町に開會して十一月五日は鶴鳴館にて園遊會を催し全六日は高島尋常小學校に會して演說報告等ありたり會するもの四十名程なりしと

○鐵道線 鐵道布設の線路につき我郡有力者の盡力中なるは既に雜録にも記す如く鮎澤次郎兵衛、米澤三十郎二氏は今もなほ上京中なれど郷里にありては降幡倉藏、武川又兵衛等の諸氏専ら周旋して材料を蒐集し取調へを了りて其結果を精密に上京者の許へ送りたり又右運動の爲め製絲各社より代表者一名宛上京せり



○各小學校生徒學力試驗 千野郡視學は先頃郡内の小學校を巡視して尋常科四  
 學年生及び高等科二學年生の學力を試みられたり其結果は左表の如し

表中○印は補習

四〇

諏訪郡各小學校高等第二學年<sup>尋常補習</sup>生徒學力比較試驗成績表

總點	摘書	算術	受驗	校名	總點	摘書	算術	受驗	校名
二〇〇	一〇〇	一〇〇	人員	北大塩	二〇〇	一〇〇	一〇〇	人員	平野
一五三	六六	八七	二六	北大塩	九五	二六	六九	一二	北野
一三四	六七	六七	二八	落合	九〇	四二	四九	二二	北山
一二七	五八	六九	一四	有賀	八八	三八	五〇	三三	下諏訪
一一七	五九	五八	二三	原	七四	三二	四二	六〇	乙事
一一六	五五	六一	四一	諏訪	七一	四三	二八	九〇	富士見
一〇四	五五	四九	一七	中洲	六五	四一	二四	一八	玉川
一〇三	五五	四八	三三	茅野	三四	一九	一五	一三	湖南

諏訪郡各小學校尋常科四學年生徒學力比較試驗成績表

總點	摘書	算術	受驗	校名	總點	摘書	算術	受驗	校名
二〇〇	五〇	五〇	人員	落合	二〇〇	五〇	五〇	人員	神宮寺
一五六	三七	四〇	六五	落合	一〇三	二八	二七	一五	富士見
一四九	三三	三五	八一	高島	一〇一	二三	二七	四九	富士見
一三七	三二	三一	四八	四賀	九九	三二	二二	三二	南大塩
一三〇	三三	三七	三〇	北大塩	九七	二五	二七	一〇	境
一二八	三三	三七	二二	城前	九六	二九	二五	二六	玉川
一二八	二七	二九	一七	中新田	九三	二八	二一	七三	湯川
一二二	二五	二五	三〇	長地	九三	一八	二四	二六	岡谷

四一





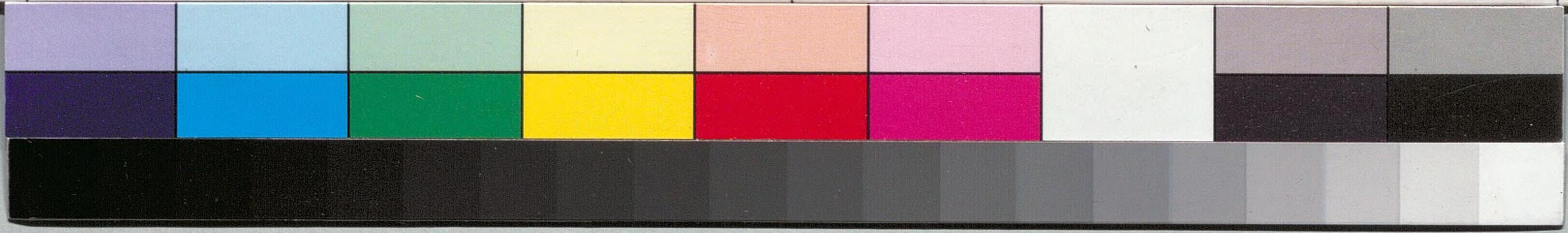
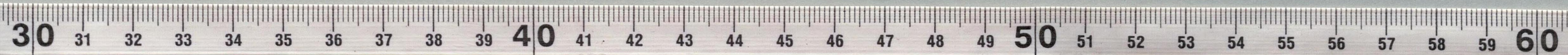
總 點書	取 摘	書 算	術 受	校	總 點書	取 摘	書 算	術 受	校
二〇〇	五〇	五〇	一〇〇	人員	二〇〇	五〇	五〇	一〇〇	人員
一一九	三〇	三八	五一	金澤	九一	二二	三三	三六	立澤
一一九	一九	二五	七五	古田	九〇	三〇	二七	三三	笹原
一一六	二四	三〇	六二	下金子	八五	二四	二四	三八	下諏訪
一一四	二六	三二	五六	柏木	八〇	二二	二五	三三	乙事
一一一	三二	二八	五一	宮川	七六	二五	二六	二五	槻木
一〇七	二四	二九	五四	小井川	七五	一九	二三	三三	有賀
一〇七	三二	三〇	四五	湊	六六	三一	二五	一〇	永明
一〇六	二六	二六	六四	原	六六	二〇	二二	二四	中村
一〇五	二六	三一	四八	湖南	五三	一七	一四	二二	今井

○諏訪英學會 牛山良助氏は此頃下諏訪友之町に諏訪英學會なるものを開設し  
 青年者に英學を教授す生徒二三十名あり氏は數年間東京に在りて英語學を研修

せられたりしか今や歸りて青年子弟の爲めに専ら其業を執らる我郡に與ふる利  
 益亦少からざるへし  
 ○教育會下筋部會 本年四月新學令實施以來會長副會長等の他の學校に轉任せ  
 しより一時中絶せし諏訪郡教育會の部會なる全會は十一月平野村小井川學校に  
 開會せり

雜 録

○諏訪正四位公 正四位公には去る十一月廿三日なる新嘗祭御祭典の爲め郷里  
 へ向け御發轍ありたり新嘗祭は本年登實の米穀を捧けて豊稔を祈念せらるゝに  
 ありと承はりぬ我郷の如き比年豊稔相續き今年の収穫又通信欄内に報する如し  
 今我正四位公の御祭典を行はるゝを拜して郡民の感佩已む能はざるものあらん  
 我等は御祭事了りて恙なく御歸京あらせられん日を待つ  
 ○鐵道運動 中央線鐵道線路の義に付き先般中央線沿道地方の衆議院議員上京  
 委員及び有志者諸氏は湖月樓に會合せられ相談を遂げ事務所を芝公園内十一號





志賀次郎氏方に設けられたり諏訪郡よりも生絲家を代表して鮎澤次郎兵衛氏郡  
 總代米澤三十郎金井汲治の二氏上京せられ専ら奔走せらるゝ由金井氏は先頃都  
 合により歸國せらせられたりしか此頃製絲家各社總代諸氏上京盡力せらるゝ由  
 なり

○會誌遞送 は先に郵便規則改正以來本會々計上大に不都合を感じたる所先般  
 在上諏訪鴻英社と特約を結び諏訪郡部丈の遞送を委託し又東京市内は印刷物配  
 達會社に委託することゝなり至極好都合とはなれり  
 ○小川平吉氏代言披露の宴會 會員法學士小川平吉氏は十月三十日錦輝館に於  
 て代言披露の宴會を開らき長善館々生一同に招待狀を贈られたり來會者は帝國  
 大學教授法學士新聞記者代言人等無慮二百餘名さしもに廣き同館の樓上に充滿  
 せり午后四時頃一同門前にて撮影し後階下の大廣間にて桃川如燕の講談及歸天  
 齋正一の手品あり終て一同樓上の宴席に着し先つ小川氏披露の抄揆をなし次に  
 渡邊千秋積穂陳重岡村司棟居喜久馬高木守三郎の諸氏の祝詞演説あり赤沼金三  
 郎氏は長善館惣代として宮本叔氏は信濃同窓會を代表して祝詞を述べ木川又吉

郎高橋作衛樋口貞橋の諸氏は祝文祝詩を朗讀し終て酒間更に正一の手品數番あ  
 り宴酣にして劍舞あり踊舞あり小川君萬歳の聲は場内に轟き各十分の歡を盡し  
 て散開せしは午后十一時頃なりし

○陸軍豫備尙武學校 は我郷人中島謙吉氏の設立にかゝり其名の示す如く専ら  
 陸軍士官學校幼年學校入學者の豫備として普通學一般を教授し講義録雜誌を發  
 刊して専ら尙武の氣象を振作するを勤む講師には野村陸軍大尉内藤耻叟飯盛挺  
 造諸名家もあり今春神田仲猿樂町に移りてより生徒の數も増し目下在學生百名  
 以上に上りたり

○我郷出身の兵卒 は一般に軍務規律に服従し技術藝能熟達するもの多く軍人  
 社會に名聲すくれてよろしき由なるか昨年末近衛第三聯隊へ入營の小平留四郎  
 植松金一郎の二氏は今度上等兵に任命せられたり

○注意 先に在京杞憂生の名を以て渡邊千秋君傳に付き寄稿せられたる人あり  
 しか本會々誌には匿名の投書は掲載せざる内規なるを内て本會誌に登録せず向



後寄稿せらるゝ方は必ず本名御記し有之度候

○賛助金領収高 前項記載領収高の外賛助金及び外員領収高は左の如し

一金一圓五十錢(廿五年分) 笥 朴 郎 一金一圓(廿五年分) 岡 部 廣

一金一圓全 伊藤 彌一郎 一金一圓全 武井 一郎

一金一圓全 田中 宗吉郎 一金卅三錢五厘(九月以後) 矢崎 五百藏

一金卅三錢三厘(九月以後) 福 田 富藏 以上賛助金

一金二十錢(自九月至廿六年二月) 堀内 直次郎 以上外員會費

○前項賛助金 承諾諸君の外に左の諸君の承諾を得たり

一金七圓年額 坂 本 俊 健君 一金五圓年額 坂 本 俊 篤君

一金五圓全 千 野 儀 正君

以上二項は本會記事に入るへき筈なりしか會誌印刷の都合により此に掲載せるものなり

# 廣 告

本會ニ關スル用向ハ一切東京市本郷區  
元町二丁目五十番地諏訪青年會事務所  
内下名宛ニテ御通報有之度候

明治廿五年十二月

全 諏訪青年會幹事 小 川 平 吉  
澁 川 正 男



禁  
賣  
買

發行人 小川平吉

編輯人 小平保藏

印刷人 赤沼金三郎

東京本郷元町二丁目  
五十番地

諏訪青年會事務所

東京市神田區南神保町十番地三島印刷所印行